



TITLE:

新任研究者のヒアリング調査にみる若手研究者の研究環境の現在と支援課題--(2)課題編

AUTHOR(S):

仲野, 安紗; 鮎川, 慧; 太田, 一陽; 小泉, 都; 橋爪, 寛;
伊藤, 健雄

CITATION:

仲野, 安紗 ...[et al]. 新任研究者のヒアリング調査にみる若手研究者の研究環境の現在と支援課題--(2)課題編. 2019: P8-1.

ISSUE DATE:

2019-09-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/244473>

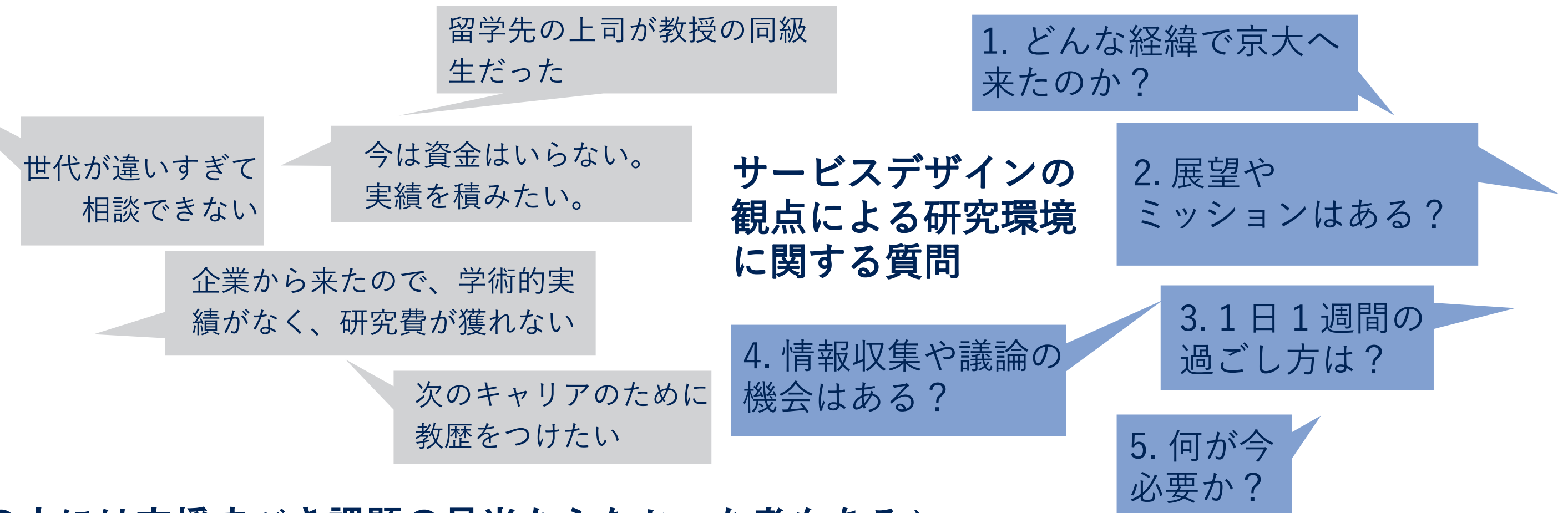
RIGHT:

新任研究者のヒアリング調査にみる 若手研究者の研究環境の現在と支援課題—②課題編

仲野安紗、鮎川慧、太田一陽、小泉都、橋爪寛、伊藤健雄（京都大学 学術研究支援室）

背景となる新任研究者ヒアリング調査 概要

- 趣旨 若手を中心とした研究者ニーズとその背景となる研究環境における課題を把握
- 方法 研究室を訪問し、研究環境に関する状況を中心にヒアリングを実施。結果を現状と課題に分け、定性的・定量的分析を行った
- 調査期間 2016年5月～2017年8月
 - ・着任後最短1ヶ月～最長10ヶ月で実施
 - ・新任の半数以上が助教、80%以上が任期付き相当での雇用、研究科ごとに流動傾向が異なる



若手研究者の語り及び数値から見る研究環境の現状（全ヒアリング対象者の中には支援すべき課題の見当たらなかった者もある）

「新任研究者のヒアリング調査にみる若手研究者の研究環境の現在と支援課題①」で述べた量・質・制度の現状と課題をさらに具体的に示す。

- これまで限定的であった特殊環境（主に下記3パターン）にある研究者の割合が、増加している現状がある。

1. 「新制度対応ポストのメジャー化」

恩師である教授から直接声がかかり、専門分野と異なる新規ミッション（各種センターの立ち上げ、統計やマネジメント、コーディネーション能力が必要なミッション、カリキュラム構築、大学適応の新制度対応等）がメインとなるようなポストに就く研究者がヒアリング対象者全体の3割弱を占めており、彼らが孤立するパターンが多く見られる。研究環境の安定度を図る参考値として着任直後の科研費の新規採択率を引き合いに出すと、京大全体では42%（助教33%）なのにも関わらず、この集団では20%と低い。医学・薬学・フィールド研などではカリキュラムの変更や教員採用条件（臨床 / 現場経験5年以上など）が限られるようなポストが中心であり、海外経験、企業経験、他分野専攻経験など相対的には特色・強みと考えられるポートフォリオを持つ研究者が着任していると見られる。また、このようなポストで対応のできる、優秀な研究者であっても産業界から基礎研究の分野にきた場合、論文評価ベースの学術界でのスタートアップが困難な状況に陥っている。

2. 「研究室人口比のアンバランス」

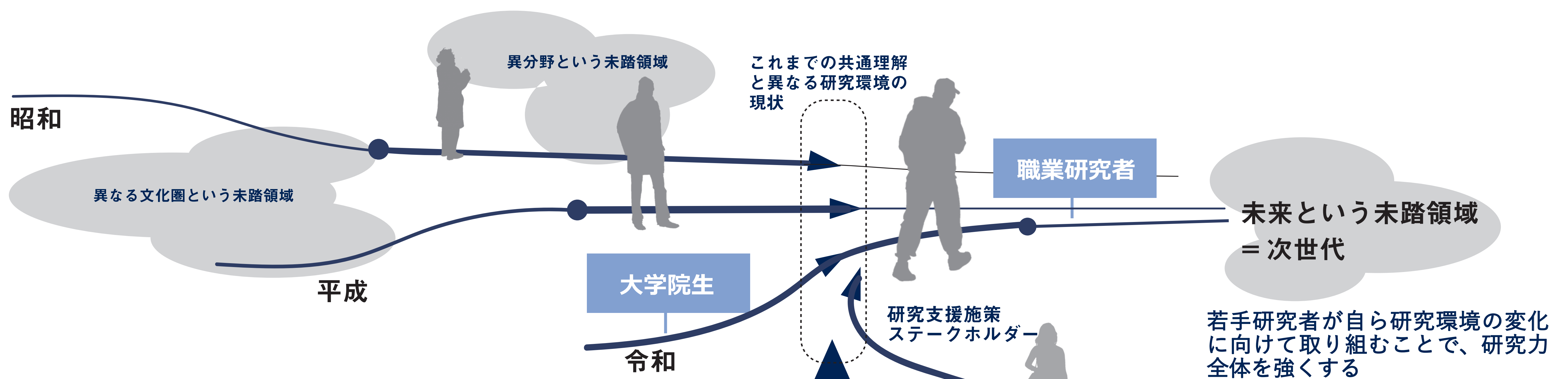
伝統的な（教授の研究テーマを展開していくような）体制の研究室においては、研究室人口比のアンバランスが若手に負担や不安感を招いている。（京大新任研究者は、任期なし2割、特定6割、大学院担当（実質任期あり）2割）また、大学院担当のポストや講座制研究室の場合は任期がなくても職位が上がっていかない。助教と教授という組み合わせの研究室が多く（医学研究科は例外）、そこでは主に教授が渉外に関するマネジメントを担うとのことである。若手研究者は研究資源的には不自由が全くないものの、教授と助教の役割は固定化されたままとり、若手研究者は積極的な情報収集への動機を持てにくく、同世代間での身近なグランドテイクの関係性や切磋琢磨環境は得難いものとなっている。

3. 「100%専任義務＝寄付講座・プロジェクト雇用」

2018年5月現在、京大には40の寄付講座がある。寄付講座の「研究室人口比」はアンバランスだが、「新制度対応ポスト」と異なり、教授との結びつきは強く、業務と専門分野の齟齬がなく、若手研究者は明確な社会的使命感を持っている。（若手でもネットワーク力のある人材の登用が多いことも影響）任期は短いもののポストを得るための最初のきっかけとして、好意的に捉えられている。一方、プロジェクト雇用の多い特定助教のうち、事実上100%のエフォート義務のある研究者は、研究の方向性を自身で決定できないだけでなく、プロジェクトがうまくいかない場合に研究成果がうまく出せないこと、移籍を望んでいて新たな研究費を申請できないなど、キャリア形成に大きな影響がある。加えて、指導的な人物との距離が遠く「アンバランス研究室」にある状況に近い状況がある。

- 以上の結果、典型的な大学研究者像は存在せず、「研究者としてのライフデザイン（どの時期に何を目指して活動するか）の長期的計画」は個々でカスタマイズされた多様なものとなっている
- それにも拘らず、ポストに関する制度の流動化に対応できないまま、研究室内では伝統的な体制から脱却できていない

新たな研究環境の現状が、研究者間・支援者間・施策検討者間の情報連携・共通理解を阻害する要因の1つに。箇々別々の「研究者としてのライフデザイン」をもつようになった研究者にとって、身近であるはずのステークホルダーとの繋がり、従来の異なる文化圏（国際）や異分野の学問（学際）等に対する連携支援と同じく、接続に後押しが必要な枠組みとなっている。

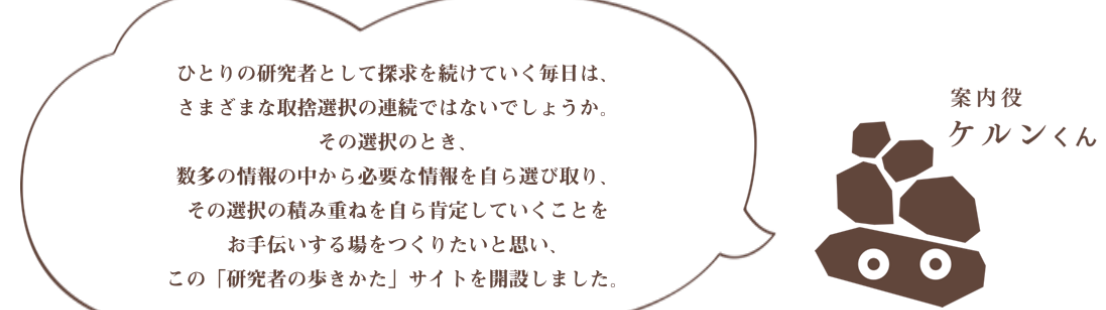


インクルーシブな手法

- 研究者の関心事や疑問などを、上記研究環境の研究者、外国人研究者を含む、全ての研究者に共通する基本的な研究活動に落とし込んで整理。
- KURA 外国人支援チームの協力を得て、日英完全バイリンガルを実現

研究者自身で判断してもらう材料を集める

- 各テーマに精通する専門家などに現在の課題をインタビューし記事化して提供



学内 23 支援組織の情報連携

- 研究者に対する取り組みを網羅的に把握している組織がない。そのため、若手研究者が必要とする学内情報や支援情報を体系的に可視化することができておらず、さらに包括的に収集・分析する仕組みもない。→サイト構築のプロセスを通じ、連携を実現

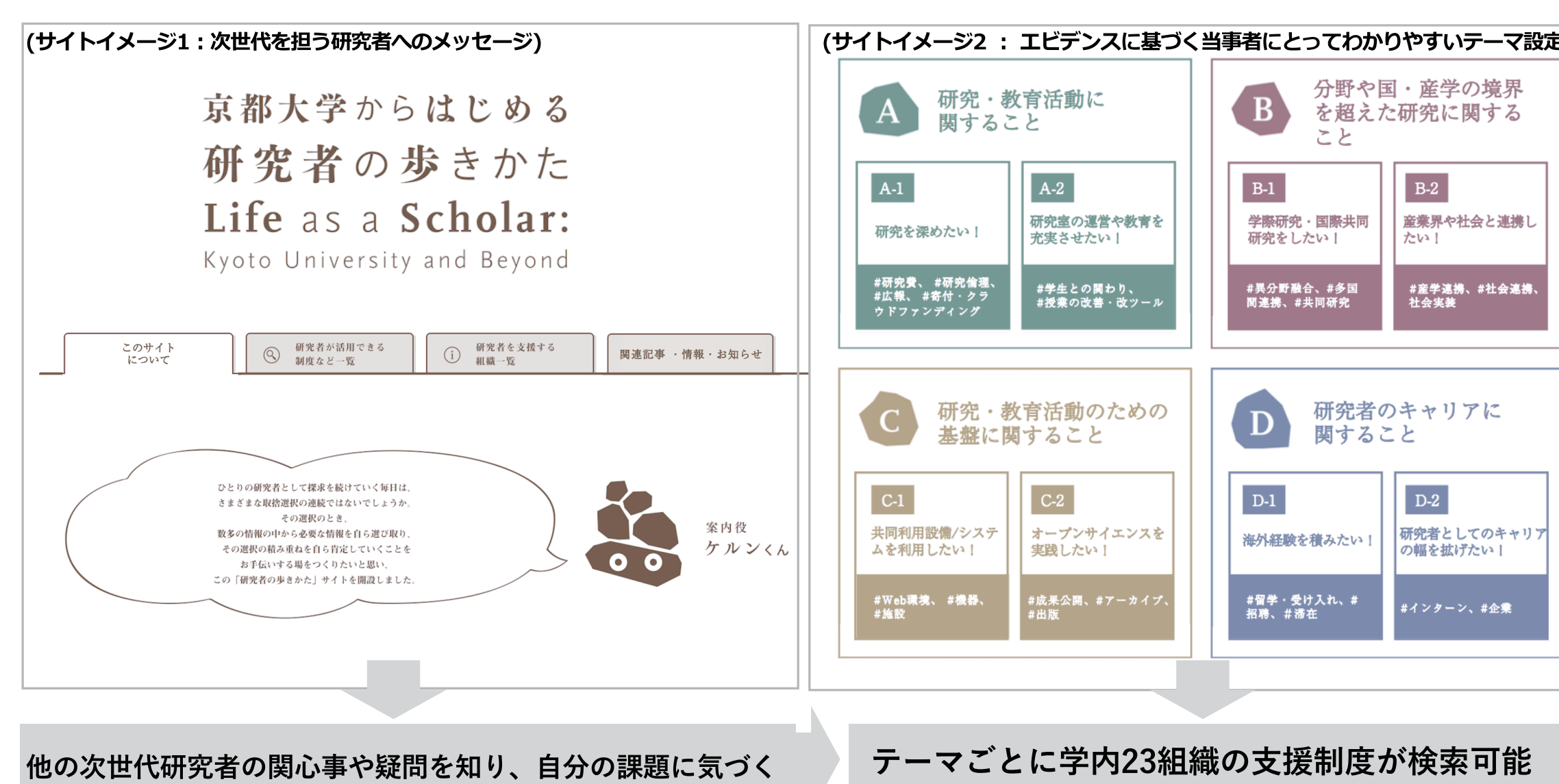
残されている課題 ➡ メカニズム調査へ

- コンテンツとしての支援の設計に繋げる：周辺からのパッシブな支援から、直接的でアクティブな支援を検討する必要
- 着任後から3年経ち、安定してきた研究者は、現在、①どのような研究室環境にいて②どのような研究パフォーマンスを発揮しているだろうか。客観的指標とフォローアップ調査を実施し①と②のメカニズムを調査し、どのような状況の研究者を支援対象としてプライオリティを上げるべきか、影響や効果の面からの検討に繋げる。

研究者間・支援者間・施策検討者間のかすがいとなる活動を行う

- 研究者間・支援者間・施策検討者間が共通の情報（支援情報や現状について）を得る
学内 23 支援本部組織が連携し、専門家の協力を得て構築する「ポータルサイト」の開始
- 研究室内で暗黙知的に伝承されてきた情報のうち、現在抜けがちになっているものを埋める
セミナーなどリアルな場でのスキルセット・マインドセットの育成

かすがいツール例：「研究者の歩きかた」サイトの紹介



下記の8つのテーマで研究者の活動全体をカテゴリ化。サイト内ではテーマ別に、研究者からの生の声を紹介しています。

- 研究・教育活動に関すること
研究を深めたい！
研究室の運営や教育について知りたい！
- 分野や国・産学の境界を超えた研究に関すること
産業界や社会と連携したい！
学際研究や国際共同研究をしたい！
- 研究・教育活動のための基盤に関すること
共同利用設備 / システムを利用したい！
新たな成果公開の方法に挑戦したり、オープンサイエンスを実践したい！
- 研究者のキャリアに関すること
研究者としてのキャリアの幅を広げたい！
海外経験を積みたい！